

博士論文審査結果の要旨

学位申請者 藤 田 泰 子

主論文 1 編

Incidence of lymphatic involvement in differentiated-type intramucosal gastric cancers as examined by endoscopic resection.

Gastric cancer, 2015 Feb 1 [Epub ahead of print].

審 査 結 果 の 要 旨

胃癌におけるリンパ管侵襲の有無はリンパ節転移の指標として重要であることが知られている。近年、内視鏡的切除術は早期胃癌に対して広く行われているが、粘膜内癌であったとしても、リンパ管侵襲が時として見られる。しかし、主に内視鏡的治療の対象となる分化型の粘膜内癌では、その正確な頻度や特徴は未だに明らかにされていない。

申請者は、2011年9月から2014年2月にかけて、京都府立医科大学附属病院で内視鏡的治療が施行された分化型の胃粘膜内癌、238症例、300病変を対象とし、全ての切片において、HE染色およびリンパ管内皮細胞のマーカーであるD2-40の免疫組織化学を施行し、分化型の粘膜内癌におけるリンパ管侵襲の頻度を検討した。また、リンパ管侵襲を伴う癌の組織像や悪性度を知るために、リンパ管侵襲陽性であった病変では、その組織学的特徴および癌抑制遺伝子p53の蛋白過剰発現の有無について、抗p53抗体を用い、免疫組織化学により検索した。

胃内視鏡的切除検体における分化型粘膜内癌のリンパ管侵襲の頻度は2.0% (6/300)であった。腫瘍長径3 cm以下の病変ではその頻度は1.8% (5/279)であり、潰瘍もしくは潰瘍瘢痕のない病変では2.2% (6/276)であった。リンパ管侵襲の見られた6病変は純粋分化型が3病変、未分化混在の分化型が3病変であり、純粋分化型におけるリンパ管侵襲の頻度(3/286, 1.0%)に比し、未分化混在型でのリンパ管侵襲の頻度(3/14, 21.4%)は有意に高かった。リンパ管侵襲が見られた6病変のうち、4病変ではp53蛋白の過剰発現が見られた。

リンパ管侵襲は、現在、胃癌治療ガイドラインにおいては早期胃癌のどのような病変においても追加外科切除の対象となる因子であるが、分化型の粘膜内癌におけるリンパ管侵襲についてはその頻度すら今まで報告がなく、本研究において、分化型の胃粘膜内癌におけるリンパ管侵襲の頻度が、2.0%であることが明らかとなった。また、リンパ管侵襲の頻度は純粋分化型の癌より、未分化混在型の癌の方が、有意差をもって高いことも示した。従って、未分化型成分の混在した分化型の粘膜内癌の症例では、より注意深くリンパ管侵襲を検索する必要がある。分化型の胃粘膜内癌におけるリンパ管侵襲の頻度、組織学的特徴を明らかにしたことは、内視鏡的治療後の追加治療を考慮する上で重要と考えられた。分化型の胃粘膜内癌におけるリンパ管侵襲がリンパ節転移のリスク因子となるか否かを検討するには更なる症例の蓄積が必要であり、本研究で明らかとなった頻度を念頭にリンパ管侵襲を検索し、症例を集積することが求められる。

以上が本論文の要旨であるが、粘膜内分化型胃癌におけるリンパ管侵襲の頻度を明らかにした点で、医学上価値のある研究と認める。

平成28年1月21日

審査委員 教授 田 中 秀 央 ㊦

審査委員 教授 伊 藤 義 人 ㊦

審査委員 教授 大 辻 英 吾 ㊦